

ガーンジー島における海洋動物学者 H. J. Fleure の形成

——アベリストウイス大学、地理学・人類学部初代教授の学術的背景——

河 島 一 仁

I. はじめに

ウェールズと北アイルランドには野外博物館がある。それらの最初の名称は、Welsh Folk Museum (以下、WFM) と Ulster Folk Museum (以下、UFM) であった。前者は1948年に、後者は1963年に創設された¹⁾。WFMの創立者はIowelth C. Peate (ピート) (1901 - 1982) であり、UFMのそれは Emyr E. Evans (エヴァンス) (1905—1989) であった。

彼らには複数の共通点がある。第一に、2人ともウェールズ人であった。第二に、彼らは University of Wales, Aberystwyth (アベリストウイス大学) の Department of Geography and Anthropology (地理学・人類学部。Department をひとまず「学部」と呼ぶ。) の同窓であった。第三に、彼らはこの学部の初代教授であった Herbert J. Fleure (フルール) (1877-1969) の弟子であった。ただし、ピートは WFM に終生勤務したが、エヴァンスは Queen's University Belfast の地理学部の教授でもあった。なお、エヴァンスがアイルランドで最初に大学に任用された地理学者であることはよく知られている。所属した機関の違いはともかく、ピートとエヴァンスは、野外博物館を創出することになぜ心血を注いだのであろうか。

アベリストウイス大学では、19世紀に化学者や地質学者が自然地理学の講義を担当している。時期は下がるが、1907年～1918年にも地理学の講義は行われていた。そして1918年に地理学・人類学部が発足したのである。ピートはその第1期生で、エヴァンスは第3期生であった。彼らがフルールから受けた地理学の教育はどのようなものであったのか。その時の感化が、後年に二人の人物をそれぞれ野外博物館の創出にいたらせたのであろうか。

これらの疑問を解くことを先送りにして、ピートとエヴァンスを教育したフルールを本稿は考察の対象とする。アベリストウイス大学の上層部から、地理学部の創出と、その初代教授になることを打診された時、フルールは動物学の教授であり、その専門は海洋動物学であった。それをやめて、新たに地理学の教授になることをなぜ引き受けたのか。しかも同大学の上層部は地理学の学部を計画したにもかかわらず、なぜ人類学も名称に加えたのか。これらの疑問もそのままにして、アベリストウイスに来る以前のフルールに本稿は焦点を据えることにしたい。

フルールが、チャンネル諸島のガーンジー島で、どのような経緯で海洋動物への関心を抱くようになったのか。それを解明することはほとんど不可能である。とはいえ、彼の心の中の、言い換えると内面的な関心の醸成を経て、海洋動物に関する研究は始まったはずである。しかし、外部からの影響はまったくなかったのであろうか。それを探ることを本稿の目的とする。

IIでは、彼の家族に関してまず把握する。III・IVでは、ガーンジー島における海洋動物に関する研究とフルールとの接点を明らかにする。そしてVでは、フルール自身の記述をもとにして、彼が受けた教育に関して考察する。

以上のような考察のために、第一にガーンジー島のセンサス資料を用いる。第二に、ガーンジー島における博物学研究団体である 'The Guernsey Natural Science Society' (ガーンジー自然科学協会) における海洋動物に関する研究とフルールとの接点を明らかにする。第三に、'the Guernsey Society' (ガーンジー協会) の刊行物に掲載されたフルールの文章を使うことにする。なお、アベリストウイス大学におけるフルールの職階に関することは、2017年に同大学のアーカイブで筆者が得た資料に基づいているが、紙幅の都合上、それらに関する典拠を省略していることをお断りしておく。

II. フルールの家族と経歴

チャンネル諸島は、連合王国の王室領である。行政的にはガーンジー島・アルダーリー島などの the States of Guernsey とジャージー島の the States of Jersey よりなる。これらは位置的にはフランスに近く、地名・人名などにもフランス語が散見される。

フルールの父ジョンは、1803年に生まれ、1890年に死去した。ジョンは9人の兄弟姉妹の末子であった。The Priaulx Library (プリオー図書館) の資料によると、ジョンから4代前までさかのぼることができ、確認できる最古の人物は1686年に生まれている。この一族は、すべてセント・ピーター・ポートに居住してきた。

ジョンは生涯に3度結婚している。最初の結婚は1828年に、2度目の結婚は1856年に行われた。そして最後の結婚は1872年で、彼は69歳であり、妻は30歳であった。プリオー図書館所蔵の1881年のセンサスによると、ジョンは77歳、妻は39歳、娘が5歳、そしてフルールは3歳であった。この4人のほかに、24歳の姪と72歳の女性下宿人も同居していた。同じセンサスによると、ジョンは 'accountant States Office' であった。つまり、彼は、会計士として States of Guernsey に勤務していたのであろう。ジョンは1890年に87歳で逝去した。この年、フルールは13歳であった。海洋動物への関心は、父からの影響であったのかどうか、それを知る手がかりを筆者はまだ探し出せていない。

フルールの経歴に関して、Alice Garnett (ガーネット) が詳細に述べている²⁾。それによると、彼は1885年から1891年までガーンジー島に位置した the States Guernsey Intermediate School に在籍したが、病気のために出欠は不規則であった。この学校は Grammar School に相当する。その後、アベリストウイス大学に入学し、海洋動物学を専攻した。卒業後にチューリッヒ大学への留学を経て、母校のアベリストウイス大学に戻り、植物学・動物学・地質学などの講師となり、1910年には動物学の教授に就任した。他方で、1907年から地理学の講師もつとめた。そして、1918年に動物学の教授を辞して、地理学の教授となった。

III. ガーンジー島における博物学研究団体

1882年10月10日に、セント・ピーター・ポートにある図書館で開催された会合で、'a Natural History Society' の発足に関して議論が行われた。この 'Natural History' は、「自然史」もしくは「博物学」を意味する。その会長に就任した E. MacCulloch (マッククロック) は、次のような就任演説

をした³⁾。

[資料 1]

In his opening address, the chairman said that such a Society as was now contemplated had long been a want in the island. An attempt had once been made, but after a time that Society became defunct. [. . .] The speaker considered that there was nothing more elevating than the study of Natural History, and of this there was in Guernsey a rich field open to students. Its Geology was certainly limited, but in its Fauna and Flora, there was endless work before the members of such a Society.

この島では、前々から博物学の研究団体の発足を望む声があった。それは、一度はできたものの頓挫したようである。時期的には明確ではないが、19世紀の後半にそのような気運がこの島にはあったのであろう。たしかにこの島は小さく、「地質の点では限られているが、動物相と植物相は、この会の会員の前に無限の研究課題となる」と、会長は述べている。

発足時の会員のなかには、昆虫・鳥類の研究を続けてきた人々も含まれていた。この会合では、会の目的と研究対象の領域に関する議論を経て、名称を‘a Natural History Society’ではなく、‘The Guernsey Natural Science Society’（ガーンジー自然科学協会）に決定し、さらに同年10月24日の総会で、‘Guernsey Society of Natural Science’に変わった⁴⁾。

発足時の会員数は30名であった。会長・副会長・会計・委員などの都合10名が、この会の運営を担った。会員は修士学位も博士学位も有しておらず、研究機関に属していたわけではなかった。この人々がどのような学術的背景を有していたかもわからない。おそらくこの会員は、何らかの職業に就く傍ら、ガーンジー島における自然の研究に取り組んでいたのであろう。

それから7年後の1889年には、会の名称は‘The Guernsey Society of Natural Science and Local Research’（ガーンジー島自然科学・地域研究協会）に変わり⁵⁾、会の目的も以下ようになった⁶⁾。

[資料 2]

That the objects of the Society shall be study and investigation of ^①the Fauna and Flora, Geology, Meteorology, Archaeology, Folk-lore and Language of the islands of Guernsey, Alderney, Sark, Hern, and Jethon, (commonly called ^②the “Bailiwick of Guernsey”), the holding of meetings for the reading and discussion of papers on the above subjects, the exhibition of specimens, and the publication from time to time of such papers and notes as may be deemed worthy of permanent record.

1882年には‘Natural Science’だけを名称に使っていたが、1889年には‘Local Research’が加わった。詳細にみると、「動物相と植物相、地質、気象、考古、フォークロアと言語」（下線部①）の研究と調査を目的としている。経緯は判然とはしないが、「考古、フォークロアと言語」などを新たに対象とすることになり、会の名称をかえたのであろう。研究と調査の対象となる地域は、‘Bailiwick of Guernsey’（ガーンジー行政長官管轄区）（下線部②）すなわちガーンジー島・アルダーリー島などであった。

この会には、おそらく1892年頃から専門分野ごとの部会が設置された。それぞれの活動に関する報告は、同会が毎年発行している‘Report and Transactions’（会報）に掲載されている。第1表はそ

第1表 ガンジー島 自然科学・地域研究協会が擁する部会の報告

掲載年	部 会							
	植物	昆虫	フォークロア	地質	考古※	海洋動物	鳥類	古物研究
1892	○	○	○	○				
1893		○	○	○				
1894	○	○	○	○	○			
1895	○			○	○			
1896	○	○	○	○				
1897	○	○	○	○				
1898	○	○	○	○				
1899	○			○				
1900	○	○		○				
1901	○	○		○				
1902	○	○		○				
1903	○	○	○	○		●		
1904	○	○	○	○		○	○	
1905	○	○		○		●	○	
1906	○	○	○	○		○	○	
1907	○		○	○		●	○	
1908	○	○	○			○	○	
1909	○	○		○		○	○	
1910		○		○		○	○	
1911		○		○		○	○	
1912	○	○	○	○		○	○	
1913	○			○		○	○	○
1914		○	○				○	○
1915		○	○	○			○	○
1916		○					○	○
1917		○					○	○
1918							○	○
1919			○		○		○	
1920							○	
1921	○		○		○		○	
1922			○				○	○
1923	○	○	○				○	○

凡例 ○：部会の報告が記載されている。

●：報告の中でフルールが言及されている。

空欄：当該の部会の報告が記載されていない。

出典：各年次の Report and Transactions にもとづく。

注：1) 部会の名称と日本語訳は以下の通り。

the Botanical section	植物部会
the Entomological section	昆虫部会
the Folklore section	フォークロア部会
the Geological section	地質部会
the Archaeological section	考古部会
section for Marine Zoology	海洋動物部会
the Ornithological section	鳥類部会
the Antiquarian section	古物研究部会

2) 部会の報告には、掲載年の前年における活動が記録されている。

の一覧である。それぞれの部会の設置年に関しては明確ではないが、[資料1]には、動物相・植物相・地質が明記されていることをみても、植物・昆虫・地質の部会は比較的多数の会員を含んでいたであろう。植物部会の報告は、1893年、1910・11 両年には掲載されていない。その理由はわからないが、1914年から1920年までの休載は、おそらく第一次世界大戦の影響であろう。とはいえ、昆虫部会は大戦中にも報告を載せている。なお、海洋動物や鳥類の部会の設置は、植物や地質のそれよりも遅かった。

IV. ガーンジー島におけるフルールの研究

「ガーンジー島 自然科学・地域研究協会」の1903年の会報をみると、フルールが3回登場する。まず、資料3の部会の報告がフルールに言及している。さらに、資料4は掲載された彼の論文の一部である。そして資料5では、退任する会長の演説もフルールに言及している。

第1表にある1903年の巻には、1902年の海洋動物部会の報告が載っている⁷⁾。それを書いたのは、同部会の幹事である R.C.Mabbs (マブス) である。

[資料3]

For many years this Society has lamented that so little work has been done by its members in connection with the extremely rich marine fauna of the Sarnian waters. Mr.Marquand's paper on the Marine Shells of this region has given an impetus to this work, and since there are a few members interested in this department, it was decided to form a section for Marine Zoology, of which the Society elected me Secretary. But there is little to report. We have the capture of the rare fish, *Lucarus imperialis*, described elsewhere in these *Transactions*, and also a paper by Mr. H.Fleure on the anatomy of the Ormer. Two of Guernsey's rarities are again reported, viz.:a Mediterranean crustacean, *Scyllarus arctus*, and that link with the past, *Comatula rosacea*, or Rosy Feather-star, which was found independently by Mr.Fleure and Mr. Marquand between tide-marks at Bordeaux Harbour.

マブスは、この水域での豊かな動物相に関する研究がほとんどなかったが、Marquand (マルカン) の海洋甲殻類動物に関する論文がはずみとなって海洋動物の部会が組織された、と述べている。これらの動物に関して、筆者の理解はまったく届かない。上記の文章の要点は、①この部会が1902年に始まること、②マルカンとフルールによる地中海性甲殻類に関する発見があったこと、③この年報にフルールの論文が掲載されていることなどである。その論文の題目は、'Some points in the history of the ormer (*Haliotis Tuberculata*)' (「アワビの生活史に関するいくつかの論点」) であった。論文の冒頭には、次の段落がある⁸⁾。

[資料4]

The ultimate aim of the scientific naturalist is to elucidate the problems "How what is has come to be what it is," and though the solution will never be complete, great steps towards that ideal have been taken, among which one of the greatest was Darwin's production of the "Origin of Species" in 1859. Since then all the biological students endeavours have

aimed at reconstructing the past history of the world of life, a history which, in the case of every type, must be the account of a long course of variations in structure, which have accumulated because they helped the animal in its struggle for existence, or helped it to leave numerous or well developed offspring.

下線部にあるように、フルールはダーウィンの「種の起源」を挙げ、生物の研究をする学生が何を目的にしているかを明示している。自らの学問的立場を示す強い意志を有していたと解することができる。

この論文はおそらく 1902 年に執筆されたものかと思われる。1901 年・1902 年の年度では、彼はアペリストウイス大学で動物学の Senior Student Assistant と地質学の Senior Student Assistant を兼務していた。そして 1903 年 1 月からスイスのチューリッヒ大学に留学している⁹⁾。

1903 年の会報は、会長を退任する W. Sharp (シャープ) の演説を掲載している¹⁰⁾。

[資料 5]

But while chronicling this vast amount of successful research, in every branch, we must not imagine that the Society's work is at an end. We need not repine that there are no world to conquer. Much remains to be done, much that is as interesting and as important as that already accomplished. To speak of the inexhaustible field of operations offered by Marine Zoology, a branch practically untouched by the Society, is but to re-echo and oft-expressed plaint in Secretary's reports and Presidents' addresses in the past. Surely the only reason why this most attractive subject has not found votaries among us is that we have not here men and women with the leisure necessary for its successful prosecution. Perhaps one of our ex-Presidents who has now retired from active service in one field will turn his attention to this subject.

One young Guernseyman, Mr.H.Fleure, B.Sc., has gained distinction for original research in this branch of Natural History, thereby gaining a Fellowship of his University, and I hope he may be induced to devote some of his holiday time among the treasure of our coasts.

この協会が多くの分野に関して取り組んできたが、しかしそれはすべてではない、とシャープは指摘した。特に最も魅力的な Marine Zoology すなわち「海洋動物学がまだ手付かずである」と強調した。第 1 表では、海洋動物部会の報告が 1903 年の年報に掲載されていたことは、1902 年にこの部会が設置されたことを示している。この部会の設置に会長としてのシャープの意向が強く働いたと解することができる。

この分野の有力な担い手として、博物学の研究に際立った独自性があり、大学の特別研究員の地位を有するガンジー出身のフルールの名を、シャープは挙げている。フルールに対して、校務の合間に故郷のガンジー島に来て、調査することをシャープは希望した。

[資料 6]

In the early part of the summer ① a marine aquarium was started at the States' Intermediate School in a tank kindly lent by the Guille-Allès Museum authorities. An attempt was made to breed the Ormer (*Haliotis tuberculata*) and examine the structure and habits of the young mollusc

; unfortunately the whole summer was taken up in discovering and eliminating the conditions under which the animal would not live in captivity ; ② but the experiments are being continued by Dr.Fleure at Aberystwyth, and we hope to be more successful next year, with previous failures to guide us.

[. . .]

③ During July Dr.Fleure made some interesting observations on the common Limpet (Patella vulgata) at Bordeaux Harbour. He marked eight limpets and the spots to which they were attached, and then moved them to distances of a foot or more; ④ at the end of four days he found that one had got back to its home, and four more had moved as if to do so; the other three were missing or unrecognisable, because the paint had worn off.

資料6は、海洋動物部会の部会長であったマブスが執筆した1904年の報告である¹¹⁾。まず、部会に関わることとして、the Guille-Allès Museum から借りた養魚タンクがthe States' Intermediate School で使われだしたことを書いている(下線部①)。しかし、セイヨウトコブシを見つけて、養魚タンクで生息できない条件を取り除くことに夏の期間を使ってしまった。そのため、実験はアベリストウイスでフルールによって続けられることになった(下線部②)。このように、この部会の研究に、フルールは深くかかわっていたのである。フルールは、この年の7月にガーンジー島でカサガイに関して興味ある観察を行った(下線部③)。その調査の期間は、4日間であった(下線部④)要するに、シャープが期待したように、フルールは7月にガーンジー島に帰省し、少なくとも4日間はフィールドワークを行ったのであった。なお、'the States' Intermediate School' は、フルールの出身校である。

1903年1月にフルールはチューリッヒ大学に向かった。そしてそこでの留学を経て、1904年9月には、アベリストウイス大学で植物学の Assistant Lecturer and Demonstrator と動物学・地質学の Assistant Lecturer and Demonstrator に着任した。それらの詳細に関してはわからないが、複数の職務を担当したのであろう。つまり、彼は母校のアベリストウイス大学で専任教員となったのである。したがって、7月のガーンジー島への帰省は、チューリッヒからの帰国と母校での任用を、母親に報告するためであったにちがいない。

[資料7]¹²⁾

The Twenty-second Annual Meeting of the Society was held on January 18th, 1905, Mr. W. Sharp, Vice-President, in the chair.

Dr. Herbert J. Fleure, D.Sc., Fellow of the University of Wales, was unanimously elected a member of the Society.

資料7にあるように、1905年1月18日に開催された第22回総会では、副会長のシャープが議長を務めた。その席で、フルールは「ガーンジー島自然科学・地域研究協会」の会員に全会一致で選ばれた。おそらく、彼は大学に勤務する初の会員であった。シャープは、副会長に退いたとはいえ、海洋動物の研究の発展を企図し、その担い手としてフルールに期待していたことが明らかである。マブスもほぼ同じ認識を有していたにちがいない。

1906年の報告¹³⁾で、マブスはフルールに言及している。

[資料 8]

It is with great pleasure that in this my last report on Marine Zoology to this Society, I am able to note a considerable increase in the interest taken in the work of the Section. ① During the year we have had an able and suggestive paper by Dr. H. Fleure on Clinging Crabs. Mr. E. D. Marquand has given us a list of the Guernsey Hydroida and Polyzoa, while we are able to print an account of the Crustacea of the Channel Islands from Mr. Sinel's able pen, and I am myself sending some account of the Actinozoa of our shore.

② The study of the habits of sea animals has been taken up with considerable enthusiasm, and there are several healthy marine aquaria in various parts of the Island.

Caves may not seem to be very intimately connected with the work of the Section, but the three excursions which have been made by the Society ③ to study the natural beauties of our coasts at close quarters have done much to stimulate interest in shore animals. I hope that this will be remembered in planning next year's excursions.

フルールがこの会報に載せた論文は、'On Crabs which Cling' と題したもので（下線部①）、その冒頭には自らの所属を 'University College of Wales, Aberystwyth' と書いている。1906年9月から1907年の8月までの年度まで、彼は植物学の Assistant Lecturer and Demonstrator と動物学・地質学の Assistant Lecturer and Demonstrator を兼務していた。

フルールのほかにも、マルカンやシネル、それにマブス自身もそれぞれ調査した。それらをふまえて、海洋動物への関心は高まっていることをマブスは指摘している。これには多少の誇張があるのかもしれないが、この島に数個の大きな養魚タンクがあることはそれを裏打ちしている（下線部②）。この部会が3度もエクスカーションを実施していることも、海洋動物への関心が高まっていることを示している。ただ、マブスの「この島の自然の美しさを研究するために」（下線部③）という表現には、筆者はいささかの違和感を抱かざるを得ない。自然科学的な考察は、審美眼とは無縁のものではないだろうか。巡検の参加者には、自然科学的な関心とは別に、風光明媚な海岸美を楽しむことを目的にした人々がいたのかもしれない。それはともかく、部会長のマブスが 'the natural beauties of our coasts' と書いていることに留意しておこう。

筆者が確認できた限りではあるが、フルールの論文がこの会報にはこれ以降には掲載されていない。その名前は、Eric W. シャープが1910年に発表した論文に再び登場する。"The Ascidians of Guernsey"（ガンジー島のホヤ類）の謝辞には次の文がある¹⁴⁾。Eric W. Sharp はおそらくシャープの息子と思われる。

[資料 9]

In conclusion I wish to return my thanks to Dr. H. Fleure and Mr. J. Sinel for their kindness in identifying a large number of my specimens, and to Mr. F. Wright for help in collectiung.

ホヤ類の採集にあたっては F. Wright（ライト）が協力し、標本の同定に関してはフルールとシネルが協力したのであった。冒頭にフルールの名を挙げていることをみると、フルールの協力の程度はシネルよりも大きかったのかもしれない。このころには、フルールはアベリストウイス大学では

動物学の教授であり、地理学の講師も兼務していたが、休暇にはガーンジー島に帰省し、収集した標本に関して意見を交わしていた、と我々は想像することができる。

シャープは、1914年4月30日に逝去した。我々は、彼がフルールを海洋動物の研究に導いた、とみなしてよいのであろうか。資料5と資料7をみると、両者には強い関係があったことはまちがいない。仮に、海洋動物への関心が父親の影響ではなかったとすれば、それに代わるのは、シャープかもしれない。ただ、これまでのところ、それを確定させる根拠を見いだせていない。

この協会は、理由は明瞭ではないが、フランス語の 'La Société Guernesiaise' に名称を変更した。1922年には刊行物の表紙がそのように変わり、1924年の年次総会の名称は 'Annual General Meeting, La Société Guernesiaise' となった。

V. The Guernsey Society の発足とフルールの懐旧

フルールは1930年にアベリストウイス大学を辞めて、マンチェスター大学に移った。マンチェスター大学における彼の研究と教育に関しても、本稿では扱わない。ただ、彼が時代の状況と無関係ではなかったことを、我々は踏まえる必要がある¹⁵⁾。1939年に第二次世界大戦が勃発し、ドイツ軍は1940年に故郷のガーンジー島を占領した。1940年に12月11日に、マンチェスター大学の John Rylands Library で彼は講演を行い、その内容に加筆して 'Guernsey: A Social History'¹⁶⁾ という論文を発表している。これは、ガーンジー島の自然・歴史・人文地理に関することを扱っている。当時の地理学は、今日のような系統地理ではなく、地誌であったことを想起することができる。それはともかく、この講演は、ドイツの占領に反対し、そのもとにいる人々を支援・鼓舞する気持ちを表している、と我々は理解することができる。

ドイツ占領に反対するフルールの姿勢は、The Guernsey Society (ガーンジー島協会) の発足につながるものであった。この名称は、博物学を基礎にして組織された La Société Guernesiaise とは、フランス語と英語の違いはあるとはいえ同じである。しかし、その目的は基本的に異なっていた。

次の資料10は、The Guernsey Society 会長の D.Banks (バンクス) が、Guernsey の行政長官である Victor G. Carey に向けて、1945年5月17日に書いた挨拶文である¹⁷⁾。

[資料10]

My dear Bailiff

On behalf of the Guernsey Society which was founded in London in 1943 to promote the welfare of Guernsey and to collaborate in furthering the common interests of the Channel Islands. I send you our fervent and heartfelt greetings.

We have long suffered with you in thought. We all rejoice beyond expression at the deliverance of the beloved Island.

これをみると、ガーンジー島協会は、ガーンジー島がドイツ軍に占領されていた1943年にロンドンで発足した。その基本的な目的は、ドイツの占領下で生活する人々を支援し鼓舞することであった。

チャネル諸島を占領していたドイツ軍が、降伏文書に署名したのは1945年5月9日である。それ

から8日後に、資料10にある挨拶文が行政長官に送付されたことになる。

この団体の The Council (評議会) は、前掲の陸軍少将バンクスのほかに18名で組織された。そのうちで学位をもつ6人のうちで、Professor はフルールだけであった。彼は1944年にマンチェスター大学を定年退職している。その後も、彼はこの団体の評議員を終生務めた。端的に言えば、彼は Guernseyman として最後まで生き抜いたのであった。

この団体は、年に4冊、'The Bulletin of the Guernsey Society' を刊行してきた。1945年4月発行の第1巻第1号には、Honorary Secretary が、Notices (告知) の箇所で寄稿を呼び掛けている¹⁸⁾。

[資料11]

ISLAND HISTORY – The Hon. Secretary would be very glad to receive from members any notes they may care to send him concerning their family history or connection with Guernsey. No doubt a good deal of this sort of thing has already been published in the *Transactions* of the Société Guernesiaise, but it is certain that a great deal has not. There is a lot of interesting history wrapped up in family records. No personal or family matter will be published without reference back to the member supplying it, but everything will be carefully filed.

要するに、the Société Guernesiaise を強く意識しつつ、博物学研究を基礎とするその会とは異なって、家族の歴史に関わるような文章の寄稿を呼び掛けている。

そしてフルールは、同誌に'Recollections of the Intermediate School for Boys' (男子中等学校の思い出) と題する文章を寄稿した¹⁹⁾。

シャープはこの学校の校長であった。フルールは彼に関して次のように書いている。

[資料12]

Mr. Sharp's hobbies included "problem sums" of which he collected many, which certainly developed our ingenuity more than detective tales or crosswords do now. On a higher level, his lessons in English literature developed a love of poetry in at least some of his pupils who can still declaim verses learned so many years ago. In his scripture lessons ① Mr. Sharp frankly revealed himself to largely non-Anglican classes as a member of the Anglican Church with a great deal of 'pride and prejudice' but no malice. ② Outside school he was one of the founders of the Guernsey Society (later Société Guernesiaise) with a special interest in the life of the sea shore. In this field of thought he was content to look at the beauties of the Creator's design, and to shut his eyes to 'nature red in tooth and claw.'

シャープはアングリカンすなわち国教会の信者であったが、そうではない宗派に属する生徒にも率直に接した(下線部①)。そして、彼は学校の外ではガーンジー協会(のちにフランス語のガーンジー協会に改称)の創立メンバーであり、海岸の生物に特別の関心を抱いていた。思想のこの分野において、彼は創造主がつくりたまいし美を見ることに満足し、「自然の激しい戦い」には目を閉ざしていた(下線部②)。

シャープが、神が創造した海岸の美しさに満足しているさまを、フルールは見たのであった。そうすると、フルールはシャープとともに海岸に行ったことがあったと解される。海岸の近くにいる

海洋動物の観察方法に関して、シャープはフルールに手ほどきをしたのではないか。ガーンジー島で、海洋動物に関してフルールに感化したのは、おそらくシャープであったと思われる。

資料8では、マブスも‘the natural beauties’という表現を使っていた。確かにガーンジー島の海岸が美しいことは、筆者も現地を確認した。しかし、あえて深く掘り下げると、美を感じるマブスやシャープなどと、フルールは一線を画していたのではないか。資料4にあるように、彼はダーウィンを引用し、いささか気負っているのは、海洋動物学の研究者としての自負を強く抱いていたからではなかったか。

後に、フルールは、アベリストウイス大学で頭蓋骨の計測にもとづく形質人類学研究を展開した。彼の研究課題の基本にあったのは、ダーウィンの進化論であった。おそらく、ガーンジー島にいたころから、それを強く認識していたのではないだろうか。

VI. おわりに

フルールは海洋動物学者として研究を開始した。それに関わる外部からの影響はおそらくあったと判断してよい。しかし、Darwinian(ダーウィニアン)として矜持を強く抱いていた彼自身が、シャープに対してどのように感じていたのかは明確ではない。それはともかくとして、フルールが海洋動物学の専門家としてアベリストウイス大学に勤務したことは、もちろん彼の能力と努力の結果であることはまちがいない。それはそうとしても、ガーンジー島には19世紀以来の博物学研究の蓄積があったことと、フルールは無縁ではなかったはずである。

本稿での成果を踏まえても、フルールがピートやエヴァンスをどのように感化したかはまだ明らかではない。おそらくシャープが学校の正課とは別に、フルールを海岸にいざなったように、フルールもピートやエヴァンスをより広い学問的な世界に導いたのではないか。自然現象を包括的に捉える博物学の方法が、その時にも効果を発揮したように思われる。しかし、結論を急がずに、フルールの研究と教育に関してより深く捉える作業を今後も続けて行きたいと筆者は考えている。

付記

本稿の着想は、2017年に行った、アベリストウイス大学のアーカイブならびに国立ウェールズ図書館での資料調査の結果にもとづいたものである。同大学のRys Jones教授には研究の機会をいただき、種々ご教示いただいた。アーカイブのJulie Archerさんにも大変お世話になった。

2019年9月にガーンジー島を訪れ、The Priaulx Libraryで資料収集を行うことができた。館長のSue Lakerさんとスタッフの皆様からご協力とご高配をいただいた。The Guernsey Society副会長のStephen Footeさんからは、渡航前に資料をご提供いただいた上に、現地でフルールの生家を探す際にはご同行くださった。上記の皆様、衷心より御礼申し上げる次第です。

本研究は、JSPS 科研費 19K01179「ウェールズとアイルランドにおける地理学の制度化と野外博物館創立者の育成」(研究代表者:河島一仁)の助成を受けたものです。

注

- 1) それらの創出に関して、筆者はすでに論攷を発表している。

- 河島一仁 (2015) 「アイルランドにおけるフォークライフ研究—野外博物館と鋤を中心に—」、歴史地理学、57 (5)、20-40。
- Kawashima, K., (2018) Geography and the Founding of Open-air Museums in Wales and Ireland, *The Journal of Ritsumeikan Geographical Society*, 30, 43-59.
- 2) Garnett, A., (1970) Herbert John Fleure, 1877-1969, *Biographical Memoirs of Fellows of the Royal Society*, 16, 254.
- 3) Transactions of the Society, *Report and Transactions of the Guernsey Society of Natural Science*, 1882-89, 9. なお、刊行年については確認できていないことをお断りしておく。
- 4) 前掲3) 10.
- 5) (1890) Rules, *Report and Transactions of the Guernsey Society of Natural and Local Research*, 1889, 121.
- 6) 前掲5) と同じ。
- 7) Mabbs, R.C. (1903) Report of section for marine zoology, *Report and Transactions, 1902*, Guernsey Society of Natural Science and Local Research, 4, 201.
- 8) Fleure, H., (1903), Some points in the history of the ormer (*haliotis tuberculata*), *Report and Transactions, 1902*, Guernsey Society of Natural Science and Local Research, 4, 228.
- 9) ウェールズに戻ってから、1904年・1905年の年度では、フルールは植物学の Assistant Lecturer and Demonstrator と、動物学と地質学の Assistant Lecturer and Demonstrator を兼務した。つまり、この頃までに彼はアペリストウイス大学の若手研究者としての地位を確実なものにしていた。
- 10) Sharp, W., (1903) Retiring President's address, *Report and Transactions, 1902*, Guernsey Society of Natural Science and Local Research, 4, 114-118.
- 11) Mabbs, R.C., (1905) Report of section for marine zoology, *Report and Transactions, 1904*, Guernsey Society of Natural Science and Local Research, 6, 315.
- 12) (1905) *Report and Transactions, 1904*, Guernsey Society of Natural Science and Local Research, 6, 317. 資料7は、部会の報告とは別の記事である。
- 13) Mabbs, R.C., (1907) Report of Section for Marine Zoology, *Report and Transactions, 1906*, Guernsey Society of Natural Science and Local Research, 8, 134-135.
- 14) Eric W. Sharp (1910) The Ascidians of Guernsey, *Report and Transactions, 1909*, Guernsey Society of Natural Science and Local Research, 11, 199-204.
フルールはシャープ父子と親しい関係を維持していたのであろう。
- 15) 研究とは別に、彼は国際連盟を支持し、戦争を回避するための平和運動を自ら行ったことだけをここに書き、その詳細に関しては別稿を期したい。
- 16) John Rylands Library Bullertin, 26, 57-81.
- 17) (1945) The Bulletin of The Guernsey Society, 1 (2), 8.
- 18) (1945) The Bulletin of The Guernsey Society, 1 (1), 2.
- 19) Fleure H.J., (1953) Recollections of the Intermediate School for Boys, *The Quarterly Review of the Guernsey Society*, 9, 11.

(本学文学部教授)

A Background of Herbert John Fleure as a Marine Zoologist in Guernsey :
Prior to Becoming a Geographer

by
Kazuhito Kawashima

Herbert John Fleure is one of the founders of British geography, at Aberystwyth. I have focused on the fact that his two disciples became the pioneers to build open-air museums in Wales and Northern Ireland. Peate endeavored to make the Welsh Folk Museum near Cardiff and Professor Evans realized his plan to build the Ulster Folk Museum at Cultra with his former students. My research has not found any evidence that Fleure himself gave some ideas to Peate and Evans. But they were his first students at the beginning of the Department of Geography and Anthropology at Aberystwyth. We may suppose that Fleure had imbued Peate and Evans with some ideas. The author hopes to identify such ideas in future. This paper is the first step towards this aim. This paper highlighted Fleure's research in Guernsey as a marine zoologist. In particular, the author tried to find his mentor at Guernsey. As a result, it is shown that the school master, Mr. W.Sharp could have been the person who introduced Fleure to marine zoology to some degree. But we cannot ignore the fact that Fleure was a Darwinist. In this regard, the methodology of his research was different from Mr.Sharp's. In any case, we should pay attention to the accumulation on Natural History by the people in Guernsey since the 19th century. Fleure's achievement in his life had a root in this island.